

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520830

研究課題名（和文） トルコ人移民と出身国とのネットワーク構築に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文） Anthropological Research on the Network Construction of Turkish Immigrants and the Country of Origin

研究代表者

中山 紀子（NAKAYAMA NORIKO）

中部大学・国際関係学部・教授

研究者番号：00288698

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ヨーロッパ、おもにドイツにおけるトルコ人移民労働者を対象とし、彼らの出身地であるトルコの農村とのネットワーク構築に関する考察を通して、トルコ移民たちと出身国の農村に残った者たち相互の生活戦略を文化人類学的に探究することを目的とした。移民労働者の出身地の村とのネットワークは、家族・親族関係を通して出身地の村から結婚相手を見つけることによってより堅固な絆を構築し、ネットワーク構築は移民先と村側両方から働きかけが行なわれる双方向的な営みである。今後は社会変化のなかで移民や村人の生活戦略がどのような影響を受けるかに注目していきたい。

研究成果の概要（英文）：

The research project aimed to investigate the life strategy of Turkish immigrants in Europe, mainly Germany, and the people living in home village, Turkey, by analyzing the way of their network construction. In this study we could show that the network was fastened by the marriage between Turkish immigrants and the people of home village and the network construction was conducted by the effort both of them interactively. For further research, we should pay attention to the social change which would affect the life strategy of immigrants and villagers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：文化人類学・民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：トルコ、ドイツ、ネットワーク、ヨーロッパ、文化人類学、移民

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパには多数のトルコ人たちが労働者として働いている。とくに1960年代か

ら相互労務協定を結んで多くのトルコ人労働者を迎えたドイツには現在200万人以上のトルコ人たちが住んでいるとされる。ドイツにおいて多数存在するトルコ人たちはどの

ような戦略をもって生活しているのであろうか。その戦略に出身地の村とのネットワークはどのように関連しているのであろうか。ドイツを中心とするヨーロッパにおけるトルコ人労働者に関する研究は、古典的労作 *Turkish Workers in Europe 1960-1975*(Abadan-Unat 1976)をはじめ、国内では内藤正典による『トルコ人のヨーロッパ』(1995)『神の法 vs. 人の法』(2007)などこれまでに多数出版されているが、その多くは受け入れ先であるヨーロッパを対象を絞ったものであり、本研究のように出身地のトルコ農村との関連に注目した研究は希少である。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ、おもにドイツにおけるトルコ人移民労働者を対象とし、彼らの出身地であるトルコの農村とのネットワーク構築に関する考察を通して、トルコ移民たちと出身国の農村に残った者たち相互の生活戦略を文化人類学的に探究することを目的とする。本研究の特徴は、研究代表者が過去すでに文化人類学的調査を行なって人間関係を構築しているM村を基点に、ドイツへの移民労働をめぐる諸現象を動的に検討することにある。ネットワークの担い手として、ドイツへの移民のみならずトルコのM村に残った人々にも注目することによって総合的(ホリスティック)な視点をもった文化人類学的調査となる。

3. 研究の方法

研究方法は、大別して、現地調査、文献調査、基礎資料のデータ化の3つである。

(1) トルコでの現地調査は、移民労働者の出身地である西黒海地方M村において行ない、ドイツでの現地調査は、M村出身の移民労働者が居住するノルトライン=ヴェストファーレン州エッセン市、およびドルトムント市において行なった。調査はライフストーリーの聞き取りや参与観察である。トルコでの調査は時期が断食月や断食祭と重なったため、ドイツから移民労働者たちが休暇でM村に帰郷しており情報を得ることができた。

代表者は、これまでにM村において長期的な人類学調査を行っており(1992~1993年)、炭坑労働の経験者が多いM村において、85戸ある家族のうちほぼ半数の家族が何らかの形でドイツ(数家族はベルギー)への移民労働者を輩出していること、また、数世代にわたる移民労働の形態は世代によって異なることなど本研究の基礎になる情報をす

で得ていた。

(2) 文献調査は、本研究にとって重要なドイツ語文献2冊を全文日本語訳して、研究報告書第1集・第2集としてまとめた。

(3) 以前の文化人類学的調査によってすでに得ていたM村の基礎資料をデータ化し、本研究の遂行に役立てた。

4. 研究成果

(1) M村自体は過疎化が進んでいるが、ドイツへの移民は退職後M村に新たに家屋を建築し、村における生活を復活させている。しかし彼らは村に完全に定住したわけではなく、ドイツとの往復生活も続けている。また、M村だけでなく近郊の町にも家を持ち、子どもたちの住居にしたり、帰省用の住居にしたりしている。こうした近郊の町に家を持っていることが、M村に在住していた移民の家族たちが町に進出するのを後押ししている。M村にあった小学校が廃校となった現在、子どもの教育を考えて町への移住を望む人々は多くなっている。

ドイツでの移民の生活は、M村で考えられている以上に過酷であり、節約しながら働きづめに働いている。金持ちで優雅な「アルマンヤル(ドイツへの移民)」と村でみなされているイメージには程遠い。しかし、ドイツへの移民も世代ごとに生活意識が異なり、若い世代は第一世代ほど節約生活ができず貯蓄も少ない。また最近10年のトルコの好景気により、M村では以前のようにドイツへの移民が高く評価されなくなっている。M村から大学へ進学する者も出現し、トルコ全体の状況変化がM村に大きな影響を与える可能性が高い。

いっぽう、ドイツでの移民たちは、M村の一角がそのままドイツへ移ったかのようなM村との関係が濃く続いている生活をしている人々もいれば、新しい人間関係を中心に生活している人々もいる。M村出身者がどれほど集住しているかによる。新しい人間関係に入る場合も、たいていはM村の位置するトルコのゾングルダク県出身者か、あるいはゾングルダク県が位置する黒海地方出身者であることが多い。そもそもトルコ有数の炭鉱があるゾングルダク県からは、同じく炭鉱の多いドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州に移民していることが多く、同郷者を見つけることは容易である。同州デュイスブルク市にはドイツ第二の規模のモスクがあり、またゾングルダク県人会も活動しており、こうした組織もまた同郷者を見つけるのに役立っているようだが、多くは隣人関係や仕事関係のなかから気の合った人々と親密

な関係を結ぶ。

M村とドイツへの移民をつなぐ最も大きなネットワークは結婚である。ドイツへの移民は子どもたちの結婚相手にM村出身者を好む。たとえば、ある60歳代の夫婦には、すべてドイツ生まれである、2人の息子と4人の娘がいるが(27歳~36歳)、全員をM村出身者と結婚させていた。親族であるものが2名、親族以外が4名なので、とくに親族にこだわっているわけではない。ただし、こうした親の意向の強い結婚のなかにはのちに離婚する場合があります、現在慎重な態度をとる親も出てきている。M村内部の結婚においても自ら結婚相手を見つける恋愛結婚が多くなってきている。M村から大学進学者が出ていることやトルコ全体の好景気を考えると、離婚の可能性の高いドイツへの移民との結婚を強く望む傾向は少なくなっていくかもしれない。

このような結婚観の変化や好調なトルコ経済といった社会変容が、現在はいまだかたく結ばれているように見えるネットワークにどのような影響をおよぼすかは今後の課題となる。

(2) ドイツ人人類学者 Werner Schiffauer によるトルコ人に関する2冊の民族誌、『スパイの農民——あるトルコの村の生活』(*Die Bauern von Subay: Das Leben in einem tuerkischen Dorf*, Kletta-Cotta, 1987)、『スパイからの移民: ドイツにおけるトルコ人、ある民族誌』(*Die Migranten aus Subay: Türken in Deutschland: Eine Ethnographie*, Kletta-Cotta, 1991)を全文日本語訳した。この2冊の文献は、トルコの農村誌と、その農村からドイツへの移民となった5人の人物を追った移民誌であり、本研究と研究方法が似ている。Schiffauerの調査したスパイ村とM村はともに黒海地方に位置する近隣県であり、両村の移民状況を比較検討することができた。

炭鉱労働があったM村と異なり、すでに国内移住が盛んであったスパイ村は、51世帯に人口が260人であった(1976年現在)。そのうちドイツへの移民は8人のみと少ない。何より異なるのは女性に関してである。ドイツへの移民労働に行くのに、女性が求められ、またそれに応えた女性がいる。M村では女性が自分で移民になった人はいない。ドイツにおいても、7世帯のうち5世帯までが共働きをしていて、この割合はM村に比べてかなり多い。ドイツで生まれた娘たちがドイツで働くことは多いが、第一世代の妻としてドイツに移住したM村出身の女性たちが働くことは少ない。スパイ村の場合は、女性が働く事で、家計は夫婦が共有する。また、ドイツにおいて集住していることもあるM村と異な

り、スパイ村出身者のあいだではそれほど互いの付き合いはしない。このように村のような隣人関係がないことが自由をもたらすのかもしれない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①中山紀子 2011、「ドイツに再現されるトルコの村——ドイツ、ドルトムント市におけるトルコ人移民調査に関するフィールド日記」『貿易風——中部大学国際関係学部論集——』6号、pp.131-141 (査読なし)

[学会発表] (計1件)

① NAKAYAMA Noriko 2010, “Ev Hanımı Olmak İsteyen Yüksek Öğrenimli Japon Kadınları: Türk Toplumunu ile Karşılaştırmalar” *International Symposium on Women’s Education in Turkey and Japan for Social Development*. (2010年10月7日). Çanakkale Onsekiz Mart University, Çanakkale, Turkey (招待講演)

[図書] (計6件)

① NAKAYAMA Noriko, 2011, “Ev Hanımı Olmak İsteyen Yüksek Öğrenimli Japon Kadınları: Türk Toplumunu ile Karşılaştırmalar ” (High-educated Japanese Women Who Want to be a Housewife: Comparison with the Turkish Society), *Women’s Education in Turkey and Japan for Social Development*, Project on the Education of Turkish and Japanese Women for Social Development, pp. 219-228. (査読なし)

② 中山紀子 2010 「トルコ人のドイツへの移民」『中東・北アフリカのディアスポラ』明石書店、Pp.176-197 (査読なし)

③ 中山紀子 2010 「トルコ・村と町とドイツと」『西アジア』朝倉書店、Pp.157-163 (査読なし)

④ 中山紀子 2010 「男はみんなオオカミよ」がもたらす秩序 —ムスリムたちの男女関係・トルコ『フィールドプラス』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 第3号、p.7. (査読なし)

⑤ 佐島隆・中山紀子共編、南直人監訳、2010、『スパイの農民——あるトルコの村の生活』(Werner Schiffauer, *Die Bauern von Subay: Das Leben in einem Turkischen Dorf*, Kletta-Cotta, 1987)「アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開—トルコ及びヨーロッパ—」「トルコ移民と出身国とのネットワーク構築に関する文化人

類学的研究」研究報告資料集・第1集、大阪国際大学（非売品）、全203ページ。（査読なし）

⑥佐島隆・中山紀子共編、南直人監訳、2010、『スパイからの移民——ドイツにおけるトルコ人、ある民族誌』（Werner Schiffauer, *Die Migranten Aus Subay: Turken in Deutschland: Eine Ethnographie*, Klett-Cotta, 1991）「アレヴィー関連諸集団とアレヴィー・エスニシティの生成と展開—トルコ及びヨーロッパ」「トルコ移民と出身国とのネットワーク構築に関する文化人類学的研究」研究報告資料集・第2集、大阪国際大学（非売品）、全290ページ。（査読なし）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 紀子 (NAKAYAMA NORIKO)
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：00288698

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし